教職をめざすみなさんへ

国語の教員を志す君へ

短期大学部初等教育科
准教授　大　塚　　守

国語の教員という枠組みを外して考えてみてください。そもそも、中等教育を施す学校における教員とはどういう仕事をする「人種」をいうのだろうか、と。

教育論議の喧しい現在、百人百様の答えが予想されます。そのどれもにも「真実」が含まれており、一概に可否を判断すべきではありません。私自身に関していえば、判断するほどの学識も経験もありません。高校教員としていろんな体験をしてきましたので、その幾つかを振り返り教員、国語の教員の仕事内容を考えていきたいと思います。

先生が生徒を育て、育てられた生徒が逆に先生を育てるという永続的な循環の中にこそ、教育という営みが内包する本質的な何かが潜んでいるように感じています。恥ずかしいことに私自身には前の段階がなく、いきなり生徒に育てられるところから出発しました。新採用２校目のその高校は、昭和50年代という戦後がはるか遠くにかすんでしまった時代においても奇跡的に旧制中学校の雰囲気を残している学校でした。興味・関心をそそらない補習授業は平気でサボるし、生徒総会で授業のよし悪しが論議されてもいました。意欲満々教室に出向いたところ数人の生徒しかいなかったということが再三ならずありました。正規の授業でも指導書をなぞったような内容には全く興味を示さず（身分を偽って教師用の指導書を寄り寄せた輩もいたようです）、豪快に舟を漕ぎます。ところが不思議なことに、教授者が教授者なりに考え抜いた説明を始めると、すぐに目を覚まし、眼光鋭くにらみつけるような態度に早変わりします。そこの呼吸は分かりませんでしたが、少なくとも教授者たる私は今日は眠られた、真剣に聴いてくれたと、右往左往し思いを馳せつつ、次時に賭ける日々でした。３年ほどしてやっと「まともに」聴いてくれるようになりました。

私の場合は、学生時代の勉強不足（後で述べますが、目指すべき教師像、モデルがなかったためだった、と今感じます）と、生徒の資質とで「育てる」段階が欠落しましたが、生徒を育てる、というより国語の教員の場合、生徒の中にあるものを「引き出す」ところから始まるのが普通です。国語という教科の性質上（例えば、英語と較べてみてください。経験に圧倒的な差があるために彼我の「力」の差はとてつもなく大きいのです）、教員が生徒以上の力を持っているとは限りません。総合的には教員の方が「上」ですが、部分的には生徒の理解の方が優れている場合は珍しくありません。ただ、生徒は自分の理解を正確に「表現する力」に乏しいのです。その表現の仕方を育てていく、このことが国語教育の第一歩だと思います。だから、教員に求められるのは「聞く力」です。生徒が何を伝えようとしているのかを虚心に聞き取り、それを個人に、あるいはクラス全員に問いかける形で的確な表現を探るというのが初年次の授業の基本です。

このようにして育った生徒は、授業の内外でいろんな事を言います。あるいは小生意気に思えるほどの態度を取ります。黙って聴いている素振りをしながら、自分の理解と異なる点があると辞書をささっと引いてニヤリとします。その顔を盗み見て教授者は確かめます。間違えたのか、解釈が浅かったのか、それとも生徒の方が自分の誤りに気づいたのか、と。またどんどん自分の意見を言

うし、文句も言います。このような生徒という「敵対者」がいるから教授者の独善は防げるのです。この段階になると、中間考査、期末考査等の定期考査は実は「授業評価」であることに気がつきます。生徒が「できない」のは、授業に一因があることに気づかされ、打ちのめされ、捲土重来を期します（生徒の勉強不足を言い立てるのはたやすいことです）。

これが私の提示するモデルです。このモデルは唯一絶対のものではありません。君たちには国語の教員を志すきっかけとなった先生がいると思います。その先生をモデルにして、まずはその先生の真似をすることです。そしてモデルに近づくにはどうすればよいか考えて色々なことを試みることです。継続的な「取組」を期待します。

「日々是勉強」

食物栄養科学部食物栄養学科
准教授　木　村　靖　浩

私自身が教員になってから然程、時間が経っていないことから諸先生のように皆さんに参考となるようなアドバイスができるかどうかわかりませんが、思うままに綴りたいと思います。

皆さんと同様、私もこれまでに多くの先生との出会いがありました。私が大学教員を目指すきっかけとなったのは、大学２年のときに出会った実験助手の先生でした。白衣が似合い、頭脳明晰、指導がとても巧妙で私もこの先生のように教育に携わりたいと強く思うようになりました。その助手の先生との縁で今日の私に最も影響を与えた２人の恩師のうちの１人に出会うことができました。卒論の研究室の先生でした。この恩師からは、実験研究の面白さを教わり、また大学院進学を勧められ私がこの道（研究者・大学教員）に入るきっかけを与えてくれました。教員になってからも次のようなアドバイスをいただきました。「縁あって出会う学生は、君の財産だよ。大切に！将来、きっと君を助けてくれる教え子が出てくるよ」。

もう１人の恩師は、米国の大学で研究員として働いていた時にお世話になった米国人教授です。その恩師からは、研究者として成長するための助言や大学教員になるために必要な様々なことを時には言葉で、時には彼の日常を観察することで教わりました。例えば、どんな些細なことにでも好奇心を持つことや耳を傾けること、学生と同じ目線で接すること、叱責するときは必ず良い点も指摘すること、寸暇を惜しんで勉強すること、誠実であることなどでした。その中でも特に感銘を受けたのが学生と同じ目線で接するということでした。洋の東西を問わず先生と名がつくと、ともすれば学生に対し高圧的で、傲慢な態度をとりがちです。私が小学校から大学院まで出会った多くの先生がそのような感じでした。学生と同じ目線で接すること、些細なことにも耳を傾けることは、現在、私が教員として最も心掛けていることです。これらは学生から信頼を得る上で非常に重要なことだと思います。信頼を得られなければ学生との良好な関係は築けず、良い指導などはできないでしょう。また教員の言動や態度（姿勢）は、絶えず学生の前にさらされています。学生は教員の一挙一動にたいへん敏感です。

学生の指導、特に授業は私にとって最も悩みが多い部分です。絶えずよりよい指導法を探し続けていますが、どうすればうまくこちらが意図するように学生を導くことがでるか、伝えたいことをうまく伝えることができるか、学習内容の理解を深めることができるか、果てしない答え探しの旅です。ただ、一つ言えることは、学生は教員の鑑です。学生は教員の良い教科書です。学生から学ぶことが多々あります。教員と学生は互いに学び

高め合うそのような関係だと思います。一生懸命教えても、全く理解されていないことがあり、本当にがっかりする時があります。勉強しない学生にその責任を全部押し付けている自分に気づくことがあります。しかし、その責任の一端はうまく伝えることができなかった私にもあるのです。日々、学生と接する中に新たな発見があり、その一瞬一瞬が教員にとって成長するための『勉強』の場だと思っています。

最後に私が教員として大事にしている言葉を紹介します。それは徳永進さんという終末期医療に携わる臨床医が執筆した「こんなときどうする？」という著書の中に出てきます。『誠意とは脚力』という言葉です。これはその先生が臨床現場で働く日常から導き出された言葉で、患者さんへの誠意とは何かと考えた時、結局、それは脚力だと述べられています。患者さんが助けを求めた時、すぐにベットサイドに駆けつけ、患者さんに寄り添うことが大事だと述べられています。私はこの患者さんという言葉を学生さんに置き換えています。仕事が山積しているときなど、煩わしいと思うことがあるかもしれませんが、助けを求めている学生に如何に適切に寄り添うことができるか、それが大切だと思います。つまり、教員という仕事は、受益者である学生にどう誠意を尽せるかということにつきると思っています。険しい道かもしれませんが、教職を目指す皆さんの夢が叶えられることを願いつつ、稿を締めます。

教員を目指すあなたへ

国際経営学部国際経営学科
准教授　榎　本　守　伸

中学もしくは高校の教員免許取得を目指すあなたへ、教員として充実した生活を送るための基本的な考え方をアドバイスできたらと思います。

1、自分の受けたい授業にする。

どの教科を担当することになるにしても、「今自分が教室に座って自分の授業を受けたいか？」この答えが常にYESとなるような授業を心がけてください。

もし、自分がこの教室に座っている生徒だとしたら退屈しないだろうか？眠くなってしまわないだろうか？自分なら目を輝かせて聞くだろうか？そのような視点は自分自身を客観視することにつながります。自分が生徒になったつもりで自分を見つめることは、授業が独善的になることを防ぐ手軽な方法のひとつです。

2、なぜこれを学ぶ必要があるのかきちんと答えられる。

これを知ることはどんなメリットがあるのだろうか。さまざまな言葉や数式などの知識を教える時、これを知ることにどんなメリットがあるのかきちんと答えられるようにします。

文字や知識はおそらく原始時代に水や食べ物のありかを誰かに伝えるためのものとして発達しはじめたのでしょう。その記号を正しく理解できたら水にありつける、食べ物にありつける。これはこの知識を学ぶ者にとって大変なメリットです。

例えば英語を覚えると、インターネットを使って世界中からこんな素晴らしいものが安く買えたよという事例を紹介する。簿記会計を覚えると、

世の中のあらゆる組織に存在する財務のことがわかるようになる。この数式を覚えるとこんな素晴らしいことが計算してわかるようになる。これは世の中でこんな風に役立っている。

もし、すぐに役立ちそうでない知識であれば、例えば抽象思考の素晴らしさを伝える。自分自身がこれを学ぶことは本当に素晴らしく意義のあることだと思っていなければ、決していい授業になりません。またこの知識が今の社会でどのように役立つかを考えることは、常に教員が社会に目を向けることにつながり自分の授業が世の中から乖離することを防ぎます。

3、自分が授業を存分に楽しむ。

授業をする時、自分自身が授業を心底楽しんで、わくわく楽しんで教える。

「この数式の意味はね？」とニコニコして話せる。教員自身が授業を心底楽しんでいると、生徒もこの授業の内容は何だか面白いに違いない、何だろうと関心を持ち始め、巻き込まれていきます。

先生自身が授業を何か義務感でやっており、できたらやらずに休んでいたいと本音で思っていればそれが授業に出てしまい、できたらサボりたい退屈な授業になりがちです。

ああ今日もこのことを教えることができて楽しいな、幸せだなと自分が思ってることが、いい授業をする秘訣です。好きこそものの上手なれは授業をする上でも大切です。その先生の楽しむ様子が生徒に、これがわかることは楽しいことなんだということを言外に伝えます。

4、生徒の幸せを第一に考える。

教職を履修するあなたはおそらく真面目にコツコツと勉強に取り組むことができるタイプでしょう。しかしあなたも中学・高校を経験して知っている通り、現実にはあなたのような生徒ばかりではありません。複雑な家庭事情をもつ生徒や、反抗的な態度の生徒、勉強が苦手な生徒もいます。勉強についていけずすっかりひねくれてしまった生徒もいます。そのような多様な生徒たちに対して杓子定規な対応は通用しません。時に厳しい態度は必要ですが、無理やり先生の権威で押さえつけようとしても溝を深めて反抗心を煽るだけの結果になることもあります。最終的にクラス運営に悩み、学校に行けなくなる先生も少なくありません。

残念ながらすべての生徒が勉強の意欲に燃えているとは限りませんが、すべての生徒が幸せになりたいとは思っているはずです。ですから、この生徒が幸せになるためにどうすべきか、自分にはどんな手伝いができるのだろうか、生徒たちは幸せになるために今何を学ぶべきだろうかという考えが先生にいつもあれば「この先生は私のことを思ってくれている」という共感が得られ、クラス運営で大きくつまずくことはなくなります。

上記のような視点をもって教職に関する知識を学んでいくと、自分自身にとっても生徒にとっても有意義で楽しい学校生活が送れる先生に一歩近づけるはずです。